不定期刊行　　第 358 号　2010.06.08

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

青空に誘われて･･･「京ヶ倉」から「大城」縦走

６月６日（日）、県大会の翌日、空白の一日。以前から気になっていた生坂村の「京ヶ倉（990m）」へ出かけることにした。県大会のとき、深志の遠藤さんが新歓登山で行ったが面白かったと言っていた。また松田さんからも昨年、県陵の生徒と行ったとも聞いていたので、ぼくも「生徒を連れて行ってみよう、その前に一度行ってみよう。」という気持ちもあり、青空に誘われて出かけた。

生坂小学校の脇を登りつめた「万平集落」の外れには、登山客用の臨時駐車場があり、すでに先客の車が５台停まっていた。9 時 30 分出発。5 分ほど林道を進んで山道にとりつく。676mの標高点を過ぎてそのまま痩せ尾根を暫く登ると、眼下にU字型の生坂ダム湖を見下ろし、遠景は北アルプスの峰々が望めるビューポイント。通称「おおこば見晴台」。あたりには赤松が多く、ヒカゲツツジも散見。急登の痩せ尾根には途中木のはしごが四カ所。稜線直下は岩場となっているので、870mのあたりから岩を縫うようにややトラバースし、登りはじめて 45 分で稜線（945m）に出た。京ヶ倉はここから稜線を北上するが、「南方のピークの眺望もいい」と聞いていたので、いったん南へ向かう。ここ「生坂山脈」は稜線直下の岩が露出してどこも断崖となっているが、その一番南のヘリにあたるこのピークからも一気に落ち込んでおり、絶景。往復 10 分一見の価値あり。

そこから踵をかえし、ジャンダルムのような格好の京ヶ倉へ向かう。稜線を進んでいくと樹林が途切れ、馬の背と呼ばれる高度感のあるちょっといやらしい痩せ尾根。ロープも張ってあったが、通ってみるとそれほどでもなかった。さらに進むと「トドの背岩」と看板のある大岩があったが、ここは生坂側に巻道がつけられていた。それなりに緊張感を味わいながら 10 時 43 分に京ヶ倉に到着。先着 2 パーティ。眺望もよくこの場所が狼煙台であったというのも頷ける。

稜線をさらに北上し、10 分で「大城（970m）」に着いた。地元ではここを「大城」と呼び、実際にここに中世、生坂地方を領有した丸山氏の山城があったというからそれが正解ではあるのだろうが、2 万 5 千図では、この地点には地名の記載がなく、ここより北方の三角点のある通称「物見岩」と呼ばれる辺りに「大城」と記載されている。インターネットなどでも情報が溢れているが、見た限りこのことに触れている人はいない。地図といえば、そもそも 2 万 5 千図にはこの山の登山道ははいっていない。この山に登る圧倒的多数ともいえる中高年登山者は 2 万 5 千図など見ないから、気づかないのだろうか。京ヶ倉から大城までの稜線も随所に岩場が現れ適度な緊張感を強いられるが、よく整備されている上に、眺望もよく快適だった。11:10、物見岩三角点（地図上の大城）、ここからさらに北上「眠峠」まで縦走することも可能だと言うことだったが、今回はここから下生坂へと下り、11:40 国道に出た。

そのあと、車をおいてある登山口まで、たらたらと国道を辿るのが面白くなかったので、薮漕ぎを覚悟で、生坂トンネルの上から一つ尾根を越え、地図を見ながら登山口へと辿った。久しぶりで一人で道なき道を地図とコンパスを見ながら歩いた。時間のある

ときにはこんなちょっとした「冒険」も楽しいものである。
　里山でありながら随所に岩場もある上に、北アルプスの好展望台としてのロケーションの良さ。一方で先に述べたように、この山は地図に登山道がはいっていないため、読図をするにも格好の山である。次回は生徒を連れて、地図読みを教えながら登ろうと無事に下見を終えたことだった。

東チベットカンリガルポ山群「ロプチン峰初登頂(KG-2　6805m)」

神戸大学山岳部・山岳会編

　昨年中国を訪問したとき、未踏峰「ロプチン峰」に登頂した神戸大学の山岳部・山岳会の一行と武漢で出会ったことは以前書いた。同隊の事務局長の山田健さんから、その報告書である「東チベットカンリガルポ山群『ロプチン峰』初登頂（KG-2　6805m）」を送って頂いた。表紙は山田さんが描かれた青空に映える同峰と登山隊の絵。420 ページに及ぶ労作、一気に読み終えたが、これはその読後感である。
　まずは、素晴らしい仕事の一語につきる。カンリガルポ山群は、中村保氏の労作で世に広く紹介されたが、これまで手つかずで残されてきた未知の山群である。そのカンリガルポの地域研究としても、非常に意義のある内容の本である。神戸大学は 1986 年のクーラカンリを始めとして、これまでも数々の素晴らしい登山を展開してきたが、今回の快挙も 1984 年にクーラカンリの登山許可を得て以来温め続けてきた企画だそうだ。報告書は、神戸大学山岳部・山岳会の会報「山と人」第 18 号として出されているが、この登山がまさに「山」だけでも「人」だけでもなく、その両方によって成し遂げられたものだということが伝わってくるぴったりのネーミングの報告書であった。
　事務局長山田さんは「クーラカンリ」遠征隊にも参加しているのだが、「クーラカンリ」が「自分が苦労して作った登山隊ではなかった」と述懐しており、今度こそ「正真正銘、自分で苦労した登山隊だ」という一言を書かれている。報告書の随所にプランナーとしてのこうした苦労と充実感がにじみでている。山田さんにとっての「ロプチン」は、自分で見つけてきた山に、自分で手をつけ、その白いキャンパスに自分の絵を描く、そんな思いだったことと思う。偵察・交渉の部分だけを読んでも参考になる。
　しかし、同時にこの登山はまさにチームワークの勝利である。まだお会いしたことはないが、隊長をつとめた井上達男さんの「登山哲学」にも感服した。冒頭の「報告書を出すにあたっては、『山』は勿論大切だが、『人』に重きを置きたいと考えていた。」と言う記述、「登攀者だけをもてはやし、チームワークの勝利だという山田さんの言葉をマスコミがとりあげていない。」ことへの警鐘、よきリーダーとよき参謀の関係が伝わってくる。
　また、中国側のチベット人隊員の一人が、「日本人のゴミを拾っている姿に学ばねばならないと思いました。」とも述べているが、これもそれまでの登山活動を通じて培われた「思想」なのだと思う。いい「山登り」だったというのは、登頂とは直接関わらないこれらを読んだだけで実感された。
　僕は、山というのは「冒険」「探検」「ロマン」だと思っているが、その三つの要素を今なお体験できるのが、この地域であろう。隊員のそれぞれの文章もなかなか読ませる。僕も近々未踏峰の偵察を控えており、色々と参考になる記事が多く刺激かつ勉強になった。そう簡単に手に入る本ではないが、内容が濃かったので紹介させてもらった。